

ません。すでに銀河到着済み。つまり「今ここ」が銀河の渦中。見ている自分だけでなく、家屋も庭木も周囲のありとあらゆるすべてのものが、銀河生起の吐息をたてています。天空彼方にみえているのは、現実に生起し現に生きられている銀河の部分的波紋、可視的になつたかすかな痕跡にすぎません。

そう思う時、遙か彼方に仰ぎみた銀河が一挙に、皮膚のすきまから全身へ吹きぬけていくような不思議な体感が起きてきませんか？外界へ走つてものごとを「向こう側」に表象する。そうして表象された色形ある可視的次元を現実だと思ひこんで疑うことがない。それがぼくたちの思考習慣です。その習慣的眼差しがもはや内外の区別を絶し、主観（認識）と客観（対象）という区別を一段下つた次元へ、屈折し変容し散開していかないでしょうか？

この一段下つた静寂の次元が、「現に生きられている銀河」です。現に生きられている銀河を「实在銀河」と名づければ、实在銀河は、夜空に浮かぶ可視的銀河（像銀河）をも上下に深く包みこんで、質的にまるで異なる巨大な不可視の静寂の次元に展開しているわけです。不可視のこの实在銀河を暗黙裡の土台（「於いて在る場所」）にしてはじめて、目前に展開する色形ある像銀河や星々や地上の光景体験が可能になる。そういつていいと想います。

音や色形あるモノゴトに、ついぼくたちの耳も眼も意識も気取られがちですが、そんなことができるためには、すでに自分の足元どころか全身全霊を、不可視の实在銀河に浸潤されていなければならぬという次第です。まさに内外打成一片（『無門関』）。

そんな实在銀河は当然、パリの街角にもアラスカの大地にもあるいはアンドロメダ星雲にも浸潤していることでしょう。今ここで触れる实在銀河を介し、ぼくらは深い静寂のなかで全世界・全宇宙に

通底していることにもなりましょう（『尽十方界真人体』）。

この不可視の实在銀河。それをぼくたちは、五感的経験とはまるで別の仕方でありありと『分かっている』でしょうか？色も形も重さも音も匂いもなにもかもないから、けつして五感的に経験できないのですが、空虚な観念ではないでしょうか？むしろなにより間近でリアルでしょう、实在銀河は。五感とはまるでちがう仕方でものごとの实在（存在）をじかに生きて識るこの認知作用。これが本書のテーマ、「沈黙」です。

【謎解きの旅】 そんな青の時間や沈黙の銀河を背景において、目前の色鮮やかなこの世の光景や人の世の賑わいを見返してみて下さい。こうしているんなモノゴトがあたり前のように出現して在ることへの驚嘆（存在驚愕）が胸に溢れませんか？そして、なんのため生まれ生きて死ぬのか、死んでどうなるかについての暗い疑念を晴らすヒントが、密かに与えられてきませんか？

沈黙を生きたとは、そういう人生の謎解きの旅をすることです。沈黙という影法師の大切さ。少しおわかりいただけましたか。ならば本書を片手に、沈黙の世界への旅にかけませんか。



『沈黙を生きる哲学』
夕日書房・2,200円